血小板凝集能検査の取り組みと現状報告

【はじめに】2011年から血小板反応性検査が持つ臨床的役割が大きく見直されており、全国で現在(2017.9)300台のVerify Nowシステムが導入され、1施設あたり年間75件の検査実施回数となっている。

当院では、2014年5月より本検査を開始し年々増加傾向にある。2016年の実施件数は、534件で検査の重要性が増している。そこで当院の取り組みと現状報告を行い今後の業務効率向上につなげたい。

【方法】Verify Now検査の実施状況についての年別検査件数、症例別検査割合、検査中に発生したトラブルの内容と対策・改善方法・改善率（前年度と比較）を調査した。対象は、2014年5月から2017年9月までに実施した908件392人、2015年8月6日から発生したトラブル26件。

【結果】年度別検査件数：初年度アスピリン37件P2Y12は56件合計93件、2015年は332件、2016年は1.5倍で534件であった。症例別件数：内頸動脈・中大脳動脈などの狭窄や閉塞症358件39%と最も多く、次に未破裂動脈瘤・クモ膜下出血など234件26%、アテローム血栓性脳梗塞97件11%であった。トラブルの内容と改善：採血や検査の手技が最も多く17件67%、機器やアッセイキットによるものは8件31%となっていた。対策前と後では18件と2件で9割の改善が確認された。

【考察】当院では、外来や術前の血小板機能抑制剤モニタリングとして迅速な検査結果が求められている。その為、トラブル対策は大きな課題の1つであった。導入前の血小板機能検査の特性を理解する勉強会のみでなく、メモ帳や検体ラベルの印字変更、電子カルテの回覧板を利用したパフレットの掲示が業務改善になったと考えられる。

【まとめ】検体採取方法の順守や転倒混和時の注意、機器の環境状況を見直すことによりトラブルの原因を排除し業務効率が向上した可能性が示唆された。